

住友の事業精神

2013年7月31日
住友グループHPより

住友の歴史は、17世紀の寛永年間に住友政友(まさとも)が京都に書物と薬の店を開いたことに始まります。

政友は商人の心得を説いた『文殊院旨意書(もんじゅいんしいがき)』を残し、その教えは今も「住友精神」の基礎となっています。

同じ頃、京都で銅吹き(銅精錬)と銅細工業(屋号・泉屋)を営んでいた政友の姉婿、蘇我理右衛門(そがりえもん)は、南蛮人に聞いた粗銅(あらどう)から銀を分離する精錬技術「南蛮吹き」を苦心の末開発しました。

蘇我理右衛門の長男で政友の娘婿として住友家に入った住友友以(とももち)は、大坂に進出、父理右衛門と協力して同業者に「南蛮吹き」の技術を公開しました。

これにより住友・泉屋は「南蛮吹き」の宗家として尊敬され、同時に大坂はわが国の銅精錬業の中心となりました。

江戸時代の日本は、世界有数の銅生産国であり、友以は銅貿易をもとに糸、反物、砂糖、薬種などを扱う貿易商になり、さらには分家が両替商も開業し、泉屋は「大坂に比肩するものなし」と言われるほどに繁盛します。



住友政友が遺した「文殊院旨意書」



住友政友の木像

確実を旨とし浮利に趨らず

住友の事業精神の源流をたどれば、それはおよそ350年の昔、初代・住友政友が遺した『文殊院旨意書』にまで遡ることになります。

晩年、庵を結んで半僧半俗の暮らしをしていた政友は、家人や彼を慕う門徒衆に商人の心得や人としての生き方を書簡などの形で教え諭しています。『文殊院旨意書』は、5カ条からなり、商人の心得を分かりやすく説いています。この教えは、住友家の家訓として長く受け継がれて来ました。

企画の遠大性・進取敢為

住友の事業は、長く別子銅山の稼行(かこう)を根幹としてきました。

この間に育まれた精神で、何事にあたって、遠い将来を見すえて綿密に計画をたて、すぐに結果が出なくても次代、三代にわたって開花させるよう努力を続けることを奨励しています。

「国家百年の事業を計らねばならぬ・・・」歴代の総理事が常々口にしたこの精神は、煙害解消のための四阪島への製錬所移転、別子銅山での植林事業、新居浜築港事業など多くの事業に見ることが出来ます。